

学位授与 平成 27 年 3 月
関西大学審査学位論文

児童養護施設の教育環境に関する社会学的研究

関西大学大学院
文学研究科
山口季音

博士論文要約

「子どもの貧困と教育」に関する従来の研究は、貧困による学習上の困難を抱えた子どもの教育問題として、主に、学校・教師が貧困による子どもの不利を十分に認識できていないことと、貧困状態の家庭の教育環境が子どもの学習意欲の形成を阻害していることを指摘してきた。そこでは、学校という公的領域での教育に対置された私的領域での教育のあり方が問われてきたが、私的領域の教育として問われてきたのは往々にして家庭での教育のみであった。しかし、すべての子どもが家庭で暮らしているわけではない。貧困が子どもの学習に対してどのような不利をもたらすのかを理解するためには、家庭での教育だけでなく「家庭で暮らせない」子どもの私的領域における教育をめぐる状況を解明することが求められる（第1章）。

この目的を達成するため、本研究では、児童養護施設における教育環境の実態とその形成のダイナミクスを明らかにする。児童養護施設に関する先行研究は、施設ではその家庭背景から学習意欲が十分に形成されていない子どもが多く、学習支援が求められる状況だが、施設職員は子どもの人数と比べて職員の人数が非常に少ないことや高等教育への進学費用まで捻出できない施設の経済的条件という構造的制約によって十分な支援ができていないと論じている。こうした先行研究は、子どもが「低学力・低学歴」傾向にあることをもって施設の教育環境には問題があるとみなしがちである。しかし、そうした見方のみでは、職員が構造的制約に置かれているにもかかわらず子どもに学習意欲を持てるよう働きかけ、教育環境を支えようとしていたとしても、そうした職員の試みやその効果が覆い隠されてしまうのではないだろうか。このように考えるならば、児童養護施設における子どもの教育をめぐる状況をよりの確に理解するためには、児童養護施設の教育環境形成のダイナミクスを描き出す必要がある（第2章）。

以上により、本研究では、児童養護施設での子ども間および子どもと職員間の相互作用に着目し、児童養護施設の教育環境がどのように形成されているのかをエスノグラフィックな調査で明らかにする。このため、近畿圏にある児童養護施設 X において 2 年間のフィールドワークを実施した（2010 年 4 月～2012 年 3 月）。調査で主に関わったのは、職員 6 名と小学生男子約 20 名である（第3章）。

第4章では、まず施設 X の子どもの学習状況と、職員の学習支援を阻む子どもと職員の人数比や経済的条件といった構造的な制約を提示した。そのうえで、施設 X の学習場面に

において子ども間および子どもと職員間でどのような相互作用が生じているのかを考察した。施設 X の子どもたち、特に学習がうまく進まない子どもたちは自らの課題を達成するよりも、他の子どもの「落ち度」を指摘することに執心し教育環境を阻害していた。職員は学習中に「おやつ」を配布するルールを子どもによって変えるなど一見「場当たりの」な働きかけをおこなっている一方で、子どもに学校の宿題を時間内に、決められた範囲までこなすことを求める「画一的な」働きかけをしており、働きかけが一貫していなかった。これら職員の働きかけはときに子どもの反発を引き起こし、さらに作業が進まない事態も起きていた。

第 5 章では、第 4 章で示した子ども間での互いを排除しあうような行為の背景に迫るため、子ども集団の仲間文化が子ども間での暴力をどのように促しているのかを考察した。その結果、施設 X の子ども集団には他者に対する優越を志向する仲間文化が形成されており、ほかの子どもの「落ち度」の指摘や暴力が他者よりも優越するための「手っ取り早い」手段になっていたことがわかった。

第 6 章では、構造的制約のもとでの職員の実践を明らかにするため、ジェンダー規範の活用を 1 つの例として分析をおこない、職員がその場の文脈に合わせて時折子どもにステレオタイプのジェンダー規範を用いた支援を試みていることを示した。その考察からは、そうした一見「場当たりの」な職員の対応には、支援のための資源が制限されたなかで、状況に合わせてより効果的な支援をおこなおうとしている合理的な側面、すなわち文脈依存的な「即興の支援」ともいべき側面があることがわかった。

第 7 章では、第 5 章および第 6 章で得られた知見を手がかりにして、第 4 章で提示した施設 X の教育環境が形成されるダイナミクスを描いた。まず、他者に対する優越を志向する子ども集団の仲間文化を踏まえれば、学習場面での子ども間のトラブルは、自分が課題を達成するよりも相手が課題を達成していないことを指摘することで「その場だけの」優位を得ようとする仲間文化に基づいた行為として捉えられることがわかった。次に、職員の一見「場当たりの」に見えた学習場面での働きかけも、職員が状況に合わせて子どもを落ち着かせて教育環境を維持する合理的な働きかけであることがうかがえた。また、「画一的」な働きかけにも、子どもが「学校の宿題ができていない」事態になることを避け、施設の教育環境をなんとか安定させているという意味があったことが示された。一貫していなかった職員の働きかけは、構造的な制約に置かれた職員が少ない資源のなかでおこなう合理的な働きかけであったのである。ただし、そのような職員の支援は子どもの学習意欲が削がれやすい状況を改善するものではなかった。こうして施設 X の教育環境は、子どもたちが互いに排除しあい学習から遠ざかろうとするなかで、職員がぎりぎりの教育環境を保ちながら形成されていた。

以上、本研究では、「家庭で暮らせない子ども」における私的領域の教育環境の 1 つとして、児童養護施設における教育環境の実態とその形成のダイナミクスを描いた。これによって、児童養護施設職員が家庭環境によって学習に困難を抱えた子どもに対してその学習意欲を十分に養える教育環境を形成できない状況を構造的に強いられていること、また、そうでありながらも、構造的な制約のなかで合理的な教育的働きかけをおこなっていることが明らかにされた。

本研究のオリジナリティは、調査テーマと研究対象の設定にある。まず、既存の「子

もの「貧困と教育」に関する研究で「空白」部分であった「家庭で暮らせない」子どもの教育に着目した点である。これにより、学校という公的領域に対する私的領域の教育が重要とされるなかで「家庭」における教育のみに目が向きがちであった従来の研究に対して、「家庭で暮らせない」子どもの私的領域における教育をめぐる困難を解明するという課題を提示した。次に、これまでにほとんどおこなわれていない児童養護施設におけるエスノグラフィックな調査をおこない、児童養護施設の教育環境の実態を示した点である。児童養護施設は子どもや職員にとって日常生活の場であり、研究上の接近が困難であった。こうしたオリジナルな観点で調査研究をおこない得られた知見の意義は以下の通りである。

第1に、児童養護施設の教育環境を子ども同士や子どもと職員とのミクロな相互行為から分析することで、教育環境を阻害する子どもの背景にある子ども集団の仲間文化や、構造的制約のなかで教育環境を維持する職員の合理的な教育的働きかけを明らかにし、施設の教育環境形成のダイナミクスを提示した。このことによって、施設の教育環境が不安定である場合に、ともすれば「支援ができていない」と見なされがちな施設職員が教育環境を支えている側面を描き出すことができた。そして子どもの学力や進学率の向上といった「結果」によって施設の教育環境の「善し悪し」を判断することには慎重でなくてはならないことを指摘した。

第2に、施設の教育環境を支える職員の実践を描き出すことによる、学校と施設の連携という実践的な課題への寄与である。これまで学校と施設の連携というと、「子どもの情報の共有」や「学校での教師の対応」が中心に議論されており、児童養護施設内での教育環境に関心が寄せられることはほとんどなかった。こうして施設内でどのような教育的働きかけがおこなわれているのかを提示することは、学校側の施設の教育環境への理解を促進させる意義があるといえる。

第3に、施設の子どもの間での暴力発生の背景を子ども集団の仲間文化から描き出した点である。このことによって、施設の子どもの暴力問題に対して子どもの発達の・心理的課題という視点だけではなく、子ども集団の仲間文化に適応した結果という視点を提示することで、施設の子どもの暴力問題への多角的な理解に貢献することができた。

第4に、ジェンダー規範の活用を例として施設職員の文脈依存的な実践である「即興の支援」を提示した点である。これまで子どもに日常生活を保障する施設職員の実践には高度な専門性が求められると指摘されてきたが、そうした実践がどのようにおこなわれているのかを実証的に明らかにした研究はほとんどなかった。本研究の知見は、児童養護施設職員が日常的におこなっている実践の有効性を示し、職員の実践への理解を促進させるものといえる。

以上、「家庭で暮らせない」子どもの私的領域の1つとしての児童養護施設における教育環境を明らかにした本研究では、「子どもの貧困と教育」研究の発展に寄与するだけでなく、児童養護施設の子どもの間での暴力問題や職員の実践への理解にも寄与する知見を得ることができた。今後、「子どもの貧困と教育」に関する調査研究が蓄積されるなかで、児童養護施設における教育に一層の注目が集まると思われる。施設の教育環境がどのように形成されているのかを考慮して子どもの学習状況や支援の形を明らかにすることは、施設の子どもの支援の方策を考えるうえで欠かせないものといえるだろう。